

講演 自分らしい働き方をめざして～一つにつながるさまざまな経験



講演「自分らしい働き方をめざして～一つにつながる様々な経験～」神戸市中央区、クリスタルホール

アイ・キューブは情報感度の高い主婦モニターによる生活者としての声を企業に届け、商品企画を支援する会社だ。取引先は大手メーカーが多く、自分たちの関わった商品が全国発売されるのが大きな喜びになっている。

やりたいこと 素直にやろう

株式会社アイ・キューブ代表取締役 広野 郁子氏



ひろの・いくこ 神戸市出身。1986年関西大文学部卒業後、リクルートに入社。出産を機に退社後、兵庫県立神戸生活科学センター(現生活科学総合センター)に嘱託勤務。三菱電機で商品開発にも携わる。2001年、アイ・キューブを設立。主婦ネットワークで企業の商品企画を支援している。

一番輝ける仕事探そう

結婚、出産、転職など生活の変化や、自分の今の暮らしの状況に合わせた働き方ができる環境が整いつつある一方で、さまざまな事情で思うように働けない人、制約がある中でも自分の力をもっと生かせる仕事があったらと考える人も多い。一人一人に合った働

き方を考える多様な働き方応援シンポジウム(兵庫県、神戸市主催)がこのほど、神戸市内で開催された。再就職を目指す人、育児休暇中の人、介護を控えている人、企業の人事担当者らが参加し、自分に合った働き方について思いを共有し、可能性を探った。

ポジティブな行動が未来に結実

約があり、周囲に迷惑をかけた方、皆の嫌がる仕事を率先してやるようにした。その後、夫の転勤で泣く泣く静岡へ引っ越した。生活科学センター時代の上司が当時の私の仕事ぶりを見て、三菱電機静岡の仕事を口添えしてくれ、採用してもらえた。そこで企画に携わった冷蔵庫が「切れちゃう冷凍」。冷凍した肉を冷蔵庫から取り出してすぐに切れる温度帯を開発してヒットにつながった。技術者はひたすら技術の進化を追求してしまいがちだが、利用者の視点で「冷蔵庫は主婦の時間を作り出すためにある」という本質をどう考えた上で美観を觀察し、企画した。

夫が今度関西に転勤。やっとな乗ったキャリアが途切れることになるので、やだやだだが仕方なく私も戻ってきた。だが、それがきっかけで起業につながった。アイ・キューブの「アイ」は自分を意味しており、自分をはげしげとさせる気持ちを込めた。文字が見やすく先が楕円で子どもが怖がらない体温計や、蒸気が外部に出ない炊飯器などの商品企画に携わった。これまでは消費者の声を



広野さんの宝物はお仕事頑張ってるねの娘からの手紙。家族の絆も支えになった

前半 自己分析し具体的な将来描く

第2部では「人生を彩る～働き方のこれからを作ろう」をテーマに、約60人の参加者による未来志向型の対話の場「フューチャーセッション」が行われた。大学や企業などで働き方の見直しやキャリアプラン形成に関わる4人が「ファシリテーター」(促進者)を務め、参加者はまず2人1組になって自己紹介や講演に関する感想を述べ合った。その後「10年前には想像していないかったけれども、今起きていることは？」のテーマで自分の過去を振り返りながら自分の今いる場所を確かめ



た。ある女性参加者は「10年前は大学4年生だった。就職したが腰掛けの意識が強く、結婚して専業主婦になったものの、向いていないと気づいた。そこで再就職したら、仕事ってこんなに楽しいんだと思えるようになった。10年前は超安定志向だった私が、ころも変化したことに私自身が驚いている」と話した。



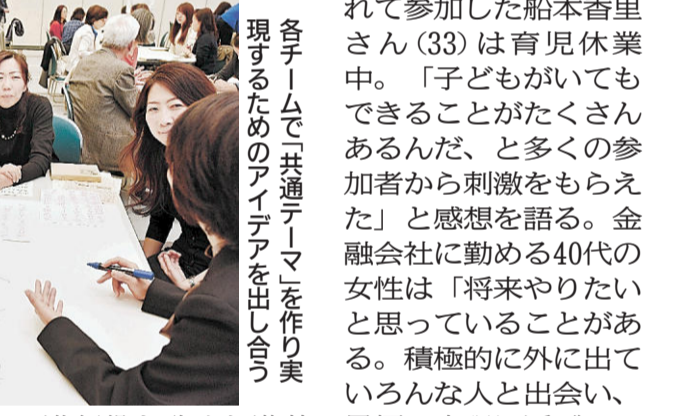
「私が目指す働き方に近い人を探しチームを作る」

後半 チームに分かれアイデア交換

る仕事を見つけ、あつとき辞めてよかったと思えるように頑張っていた」と話し、会場から拍手が湧いた。セッションは後半の「働き方のアイデア探し」へ。一人ずつ「私が目指す働き方」を考え、それを大きな文字で書いた紙を胸に掲げて会場内を歩き、自分と似たような思いを持った人や自分の考えが広がっている人を見つけてチームを作る。チームでは、メンバーが書いた思いを基に「共通テ

ーマ」をつくり、そのテーマを実現するための「20のアイデア」を出し合い、1人3票ずつ投票して上位三つのアイデアを各チームが発表した。「枠を超えたコミュニティ、場づくり」をテーマにしたチームでは「大人の部活動をやる」「外に出るきっかけをつくる」「心身を休める癒やしの場をつくる」を発表。「趣味を収入につなげる」のチームからは「自分の好きなことを極める」「よい人脈をつく

る」「やりたいことを明確に持ち続ける」を発表。「年齢に関係なく働ける生き方」をテーマにしたチームでは「体力づくり」「後期高齢者の予防対策に取り組む」「わがまちの地域づくりに貢献する」を挙げた。「時間と場所に縛られない働き方をする」のチームは「1日の労働時間を決めない」「過剰なサービスを求めない」「働く場所を決めない」「同一労働同一賃金にする」などのアイデアを出した。



進行役を務めた瀧井智美さんは「同じような思いを持つ人とつながっていることを考えることで、さまざまな気づき生まれたのでは」とセッションを締めくくり、終了後は参加者同士が名刺交換する姿も見られた。

7カ月の子どもを連れて参加した船本香里さん(33)は育児休業中。「子どもがいてもできることがたくさんあるんだ、と多くの参加者から刺激をもらった」と感想を語る。金融会社勤めの40代の女性は「将来やりたいと思っていることがある。積極的に外に出ていろんな人と出会い、目標の実現に近づいていきたい」。電機メーカーに勤める50代の男性は「参加者に男性が少なかったのが残念。男性が女性のさまざまな思いを知ることで働きやすい社会が実現していくと思う」と話していた。



「20のアイデア」の発表。他者との話し合いで、気づきや目標への道のりが浮き彫りになった

フューチャーセッション「人生を彩る～働き方のこれからを作ろう」

1人ずつ「私が目指す働き方」を考える